

研究余滴

田中喬の思索 と 阿藤伯海の詩作 — 建築論の京都学派からの一考察 —

川本 豊

1. 建築論の京都学派における田中喬

本学会誌前々号 (No.28) 研究レビューにおいてまず、福井における地域的展開として、次いで前号 (No.29) 研究レビューでは、作品集として出版された『増田友也の建築世界』の書評として、それぞれ間接的にはあるが京都大学建築学教室を中心とした「建築論の京都学派」について言及した。その際に京都学派の人物系譜は掲載しているので、ここでの再掲は避けるが、建築論の構築に尽力した森田慶一 (1895~1983)、その高弟であり独自の広範な理論展開により建築論の大きな基盤を整えた増田友也 (1914~1981) らを第一世代と位置付けた。そして増田教授 (当時) を筆頭とする増田研究室を助教授として支えた前川道郎・田中喬・加藤邦男・玉腰芳夫らをその直系の第二世代とした。増田の定年退官後は、玉腰は早逝したが、この第二世代がそれぞれ教授として後進の指導に当たったのである。

本稿では、そのうちのこれまであまり取り上げられていない田中喬 (1934~2018) について、その建築論の独自の思索について考察する。この考察に至る経緯として3点ばかり述べておきたい。

まず1点目は、すでに没後7年が経ちその成果を学術的に整理し位置付けることで、建築論の京都学派の活動・意義がさらに深化できるのではないかと考えたことによる。

2点目は、田中喬は生前に敢えて自らの研究資料などを処分しようとしたとも伝えられており、公刊された3冊の著作 (図1) 以外には、個人所蔵を除けば、その遺された資料が限られており、今後さらにその資料収集が困難になることが予想されることである。

そして3点目は、建築論の京都学派の重要な課題の一つである日本における「住まうこと - の -

風景」への問いから、増田友也と田中喬をつなぐ独自の視座が考えられる。増田の膨大な資料に比して、田中の場合は一次資料に限界はあるが、日本の「住まうこと」という根源的な問いが明らかに継承されていると考えて相違ない。

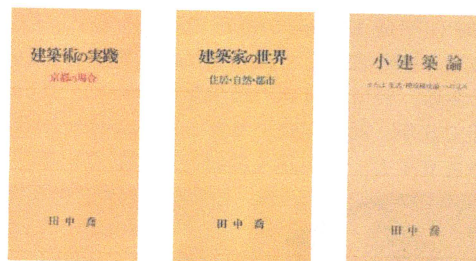


図1. 田中喬 3部作 (ナカニシヤ出版)

なお増田は道元などにも拠ったが、田中の後半の論考は、日本の詩歌に専ら拠っていることがその特徴であり、そのために却って建築との関係性が難解になり、これまであまり取り上げられていない要因の一つとも考えられるのである。この点に関して本論では、田中喬の出自と漢詩人・阿藤伯海 (1894~1965) との関係性を後述する。

2. 田中喬について

田中喬 (図2) は、1934 (昭和9) 年8月、広島県福山市で、田中家の次男として生まれた。長じて1953 (昭和28) 年広島県福山東高等学校 (現広島県立福山誠之館高等学校) を卒業、京都大学工学部建築学科に進学している。1960 (昭和35) 年に修士課程を修了、大学院時代には増田友也らが参画した神戸市「箱木家住宅」の現地調査の報告書の作成に携わっている。

1962 (昭和37) 年、京都大学に助手として採用され、講師を経て、1964 (昭和39) 年に助教授に昇任した。1976 (昭和51) 年には学位論文『建築 (的) 事象の研究』で工学博士を授与されている。指導・主査は増田友也教授である。

1985 (昭和60) 年、京大教養部に移籍、1989 (平成元) 年に教養部教授に昇任、さらに1991 (平成3) 年に京都大学大学院人間・環境学研究所教授として異動、そして1997 (平成9) 年に京

大を退官し、京都大学名誉教授となる。同年に、神戸国際大学経済学部教授に就任、都市文化経済学科に所属し、主な担当科目は「都市デザイン論」「観光資源論」などであった。(情報提供：神戸国際大学管理運営センター)

2003(平成15)年に69歳で教壇を離れ、約40年に及ぶ指導者としての経歴に終止符が打たれたのである。後に、自身の後半生について、京大教養部で6年、同大学院で6年、そして神戸国際大学でも6年と、不思議な機縁を回想している。



図2. 田中喬

(誠之館人物誌より)



図3. 阿藤伯海

(阿藤伯海パンフより)

3. 阿藤伯海について

阿藤伯海(図3)は、1894(明治27)年2月、岡山県浅口郡六條院村(現在の浅口市)の阿藤家の長男として生まれた。阿藤家三男の卓志氏が田中家に入り、その田中卓志氏の次男が喬である。つまり阿藤伯海と田中喬とは伯父一甥の血縁関係としてつながっていることになる。

1917(大正6)年に第一高等学校文科乙類に入学、1921(大正10)年に東京帝国大学文学部西洋哲学科に入学し、そこで上田敏を敬愛している。卒業した1924(大正13)年に京都帝国大学大学院に入学し、そこで支那学の教授・狩野直喜(1868~1947)と出会い、2年間の在籍中たちまち漢詩へと傾倒し終生の師として往来することになる。法政大学講師を経て、同教授、そして1941(昭和16)年に第一高等学校講師を経て同教授となり、漢文と作文を担当した。この年に阿藤没後の顕彰に尽力した「藤門書生」といわれる8名と出会っている。戦争末期、1944(昭和19)年、50歳に

して官職を自ら辞し、郷里・六條院村の家居(図4)に退隠し、その才を惜しむさまざまな招請もすべて固辞し、漢詩三昧の日々を送るのである。

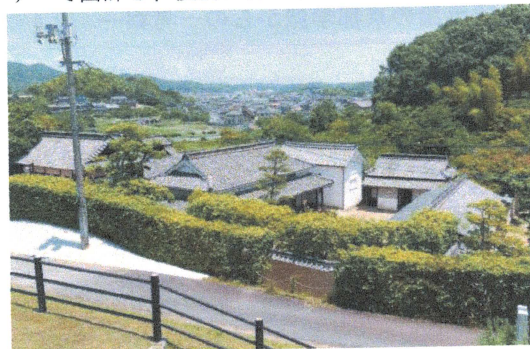


図4. 阿藤伯海旧居 全景(流芳の丘より)

その裏には、老松と母を慕う思いがうかがえ、本学会誌(No.26・2021)において、「住まいの心性と旅の風景」と題して『海道記』をテキストに論じたが、その作者の心性を彷彿とさせるものがある。1965(昭和40)4月4日午前4時4分に病没したとある。これも不思議な機縁であろう。

4. 田中喬と阿藤伯海

阿藤は50歳で職を辞し郷里岡山に戻ったが、当時の田中喬は10歳である。両者の関係を考えてみると、清貧の一高教授であった阿藤が知らず知らずに田中喬へ与えた思考・生き様という影響力は計り知れないものがあったのではなかろうか。人そのもののみならず、旧居(図5~図10)が保持する空間性も同時に働きかけていることも間違いないであろう。



図5. 旧居 長屋門



図 6. 臥龍洞（母屋）



図 7. 虚白室（書斎）

母屋の玄関には終生の師として敬愛した狩野直喜（君山）が命名・揮毫した扁額「臥龍洞」が掛かっている。しかし阿藤は分に過ぎるとして敢えて「臥龍庵」と称している。ここにも阿藤の清廉な生き様が垣間見られよう。

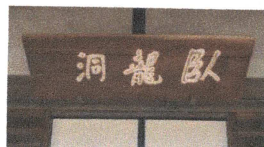


図 8. 扁額「臥龍洞」



図 9. 扁額「虚白室」



図 10. 虚白室より東庭を望む

書斎の「虚白室」とは『莊子』の「人間世篇」のなかにある、「虚室ハ白ヲ生ズ」という語句からとられたものと思われる（清岡卓行『詩礼伝家』復刻版）とされ、物がなく空虚でそのために日光が溢れる、という意味の部屋である。阿藤は詩作などにはこの部屋をことさら好んだようで、「虚白室孤望」など多くの漢詩を詠んでいる。

また臥龍庵と虚白室の間には、阿藤が好んでこれも多くの漢詩に認めた老松がまだ昭和 45 年当時には在ったようであるが（図 11～図 12）、すでに枯れて現在はなくなって、往時の面影はなく、大きな甕が置かれてある。



図 11. 虚白室より臥龍洞をみる



図 12. 臥龍松賛（阿藤伯海パンフより）

『詩礼伝家』には、阿藤伯海の人柄を語る次のようなエピソードが書かれている。それは、戦後の農地改革の前に自ら広い所有地の大部分を小作人たちに贈ったという逸話である。嘲笑する小作人たちもいたらしいが、我が家にはまだ幾巻もの貴重な書籍が溢れているのだという漢詩「茅斎」を詠んで頓着していない。まさしく我欲のない生き方なのである。田中喬は、このような清廉な人物を、しかも血のつながる伯父を、物心のついた10歳から近くで見ながら長生したのであり、強い影響を受けていることは否めないであろう。

田中喬が没した翌2019年、高弟の西垣安比古京都大学名誉教授が『京大建築会会報 Vol.84』に追悼文を寄せている。それによると、「先生の立ち姿と共に、それに重なって陶淵明の詩「飲酒 其の五」の中の句「菊を採る東籬の下 悠然として南山を見る」が思い浮かぶ。おそらく授業中、あるいはそれ以外でも、先生が最もよく言及された詩であろう。この詩の後ろの句は原文では「悠然見南山」で、これは「悠然として南山を見る」とも「悠然たる南山を見る」とも解釈できるという。つまり、人と南山は共に悠然としており、そのことにおいて人と南山は一体となっている。人が、人から切り放された対象としての環境を、人間の道具として改変し利用するという、人間中心主義的な立場に立つのではなく、上にみた陶淵明の詩の世界のように、人と環境(=世界)に間隙のないところから、我々の生きる世界を構成、構築することが求められた。」とあり、それが「共生」であり、さらに「うつす」という言葉から「住まうこと」への大きな思惟につながって行くのである。

さて阿藤伯海は生涯独身を通して。つまり阿藤家の長男でありながら後継者が不在ということになる。いわゆる相続の問題である。農地などは小作人に分配はしても、まだ家屋敷が残っている。清岡卓行氏が『詩礼伝家』で憂慮したのもこの点である。書籍のタイトルがそれを端的に表しているよう。

しかし清岡氏の予感杞憂におわり、甥である田中喬が遺された土地・建物を相続することになり、1999(平成11)年、墓所を残してそれらを

すっくり鴨方町に寄贈している。先の阿藤伯海のエピソードと紛うかたない方途であろう。まさしく受け継がれた我欲のない生き様といえよう。阿藤没後40年の顕彰事業として「阿藤伯海記念公園」(図13～図14)が整備され、2006(平成18)年に開園している。総面積6500㎡、旧居は町史跡となり公開されている。また西側の高台は「流芳の丘」と称する梅園、東側の広場には阿藤の絶筆となった詩碑と顕彰碑が建立されている。



図13. 流芳の丘

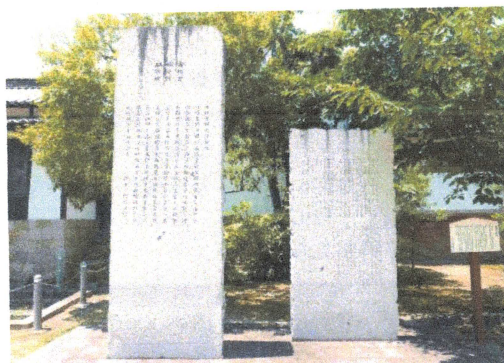


図14. 詩碑と顕彰碑

5. まとめ

田中喬は、初期の学位論文でウィトルウィウスやアリストテレスを扱う一方で、既に漢詩や良寛の和歌に着目し、後半期には斎藤茂吉に傾倒しつつ、精緻な「住まうこと」の建築論へ展開したのである。この独自の思索のあり方には、本論で扱った阿藤伯海とその旧居(臥龍庵と虚白室)の存在があったことは疑いない。この大きな影が、二重写しのように田中喬の内面に映り込んでいると考えられる。さらなる考察は、続稿に譲りたい。

(川本 豊: 福井工業大学 市川研究室・工学博士)